

八名高等小学校

八名郡高等小学校（通称やなこう）は、八名郡でただ一つの高等小学校として、明治20年（1887年）、半原藩邸跡に創立されました。校舎・寄宿舎や実習のための耕地（約16a）と果樹園などがありました。

当時、東三河に中学校がなく、旧吉田藩士の初代校長、藤森彦男よしおが進んだ教育実践を行い、県外からも生徒が集まるほど広くその名前が知られました。教育内容は、精神教育を柱として農業実習を重視し、各教科はとてもレベルの高い内容でした。英語や幾何があり、音楽ではバイオリンを習い、国語では漢詩も学びました。

寄宿舎では、軍隊式分隊制がとられ、規律を大切にしました。入校を希望するには、郡内だけでなく南設、北設、宝飯、渥美、名古屋、遠州方面から集まりました。明治31年（1898年）には、生徒数241名で、寄宿舎に入っていた生徒は57名いました。

明治35年（1902年）、八名高は廃校となりました。講堂は当時の乗本小学校に移築されましたが、メートル法で建築された建物としてよく知られていたそうです。八名高へは視察のため多くの名士が来校し、出身者にも多くの著名人がいました。

- ＜八名高を訪れた有名人＞
- ・後総理大臣 桂 太郎
 - ・後陸軍大将 乃木 希典
 - ・後陸軍大将 土屋 光春
 - ・後陸軍大臣 木越 安綱
- 他多数

- ＜八名高出身の有名人＞
- ☆ 陸軍大将 松井 石根（いわね）
陸軍大学校を卒業後、日露戦争などに従軍し、陸軍大将となりました。中国での司令官として、当時の中華民国の首都南京を攻撃しました。その時に南京大虐殺が起こり、終戦後その責任を問われ死刑となりました。
 - ☆ 俳人 富安 風生（ふうせい）
ホトトギス派を代表する俳人、大学在学中に水原秋桜子らと東大俳句会を起し、昭和45年には、日本芸術院賞を受賞しました。



松井石根揮毫の校旗

八名小学校 50 周年記念誌「わたしの八名」より

八名高の歴史

「新城地方教育百年史」「八名郡誌」より

- 1870年（明治3）5月、学聚館^{がくしゅうかん}が設立された。
- 1871年（明治4）廃藩置県で額田県となり、学聚館は2年足らずで廃校。
- 1872年（明治5）半原に郷学校設立 額田県から愛知県となる。学制発布
- 1873年（明治6）寺子屋廃止通達、小学校設置着手
22校設立(半原学校：洞雲寺，庭野学校：永源寺)
第二大区第九中学区第〇番小学〇〇学校と称す
第32番小学半原学校
(中字利，黒田，一鍬田に半原分校)
- 1875年（明治8）富岡村成立 明治9年11月：車神社の舞台に移る
- 1878年（明治11）富岡村に郡役所設置（半原陣屋跡）
- 1879年（明治12）〇〇郡第〇番小学〇〇学校と改称
第21番小学富岡学校
- 1882年（明治15）〇〇郡〇学区公立小学〇〇学校と改称
郡役所富岡中部に新築 第18学区公立小学富岡学校
- 1885年（明治18）豊橋に歩兵第18連隊 陣屋跡に警察分署庁舎新築
- 1886年（明治19）小学校令公布（学齢6～14歳） 富岡警察署設置
小学校は尋常4年（義務制）・高等4年の2段階に
(高等小学校は1郡1校を標準とされた)

<小学校令で定められた教科>

尋常小学校 修身，読書，作文，習字，算術，体操（図画・唱歌も可）
高等小学校 修身，読書，作文，習字，算術，地理，歴史，理科，図画，
唱歌，体操，裁縫（英語，農業，手工，商業も可）

- 1887年（明治20）小学校設置区域改正
八名郡19学区 尋常小19，分校12，高等小1
7月20日 富岡に八名郡立高等小学校開校（通称八名高）
〇〇郡尋常小学〇〇学校と改称
尋常小学富岡学校

- 1888年（明治21）豊橋治安裁判所富岡出張所開設
- 1889年（明治22）大日本帝国憲法発布 **尋常小学富岡学校校舎新築落成**
- 1890年（明治23）**新しい小学校令公布**（施行は25年）

尋常小学校 3年又は4年に 一畝田，庭野，八名井，富岡，宇利，
尋常高等小学校 2年，3年，4年と多様化 八名

- 1891年（明治24）〇〇郡〇〇町村立〇〇尋常小学校と改称
富岡尋常小学校（明22）・一畝田尋常小学校（明25）
各町村は高等小学校を設立することになり，八名郡立高等小学校（八名高）は明治25年9月に廃止となり，改称することになった。
- 1892年（明治25）**富岡村外13か町村3組合立八名郡高等小学校**と改称
- 1894年（明治27）日清戦争 軍歌講習会を八名高小で開催
- 1897年（明治30）教員代表，兵式体操受講のため18連隊に1週間入営
- 1898年（明治31）豊川鉄道が新城まで開通
7月の八名高生徒数 241名（寄宿舍57名，県外から11名）
通学の最遠は黄柳野からの約8km
- 1901年（明治34）八名郡，遊戯講習会を八名高小で開催（戦争色濃い内容）
- 1902年（明治35）八名高 廃校**
廃止後 **富岡村・長部村組合立八名高等小学校**創立
（歴代校長 平尾啓次郎 M35～38，鈴木鯛次郎 M38～43）
第1回八名郡連合大運動会を賀茂村の豊川河原で開催
- 1903年（明治36）国定教科書制度成立 八名郡小学校児童賞与規則制定
- 1904年（明治37）日露戦争
- 1906年（明治39）町村合併にともない富岡・長部が合併し，八名村成立
- 1907年（明治40）**小学校令改正**（義務教育年限を6年に延長）
尋常科6年，高等科2年（3年も可）。
名称変更 **八名村立八名高等小学校**
- 1910年（明治43）**廃校**（尋常小に高等小を併置）
富岡尋常高等小学校
清水野尋常高等小学校（新築移転）
- 1911年（明治44）校舎・付属物を2177円で売却。その一部は乗本小講堂として移築されたが，乗本小も廃校，のち工場として使用後閉鎖。



よし お
藤 森 彦 男 校 長

新城地方教育百年史より

旧吉田藩士，安政4年(1857)生まれ。明治20年創立以来，明治33年3月まで学
校長として在職。明治33年4月より41年1月まで豊橋市八町高等小学校長。明治
41年死去，52歳。豊橋市東田全久院に頌徳碑あり。

忠君愛国主義の教育に熱心だった。収穫したさつまいもを，校長自ら荷車を引いて
軍艦に贈り，わらじを作って恤兵部じゅっぺいに献じ，あるいはソバ粉を作って**第18連隊**
贈ったという。言葉だけでなく，身をもって生徒と共に実践したところに，同校長の
本領があったようである。

寄宿舎制度は，軍人の意見を入れて，生徒隊組織とした。寄宿する生徒は，それぞ
れの分隊に属する。1分隊が12畳の部屋で，6部隊あった。同校**寄宿舎規則**には次
のような条項があった。

「ほしいままに他の分隊に起臥きがするを許さず」「分隊学友は分隊長の指揮に従い，決
して抵抗するを得ず」「正課の前後は分隊内において専心学業に従事すべし」

また，生徒は舎内では現金を所持できなかった。校長に預けておき，購入したい物
品があるときは，漆塗りの木札に品名・量・代金を記載して提出し，許可を受ける。
渡帳に自記して現金を受け取った。帰省には，帰省願いを提出したが，校長の出納控
えと，自分の出納控えが合わないと帰省の許しが出なかった。**食事は交代で自炊**した。

<愛知教育会雑誌より>

君意を精神教育と実業教育とに鋭ふし，西村博士，東久世伯，福島伯，佐藤少将等に
私淑ししゅくする所ありて一家風をなし，又精神的鍛錬のためには天野大尉の注意を入れて，寄
宿制を兵營的の組織となし，かつ勉めて勤労規律等の習慣を養成す。

名声籍甚，校運益隆盛，君の徳風は郡外に溢れて東三の諸郡より西遠の諸村にまで及
び，化を慕いて入舎来学するもの益多し。小学校として天下比類稀なる所なるべし。

<柿原明十 八名高等小学校を偲ぶの記より>

明治20年から明治33年まで，いわゆる名校長藤森彦男先生が，献身的の教育指導
で成績大いに上がり，ために校風を慕うて来たり学ぶ者年毎に多きを加え，郡内は申す
に及ばず，南設楽郡，北設楽郡，宝飯郡，渥美郡を初めとし，名古屋地方より遠州方面
に亘り，笈きゅうを負うて蝟集いしゅうし，東参に一大学園を出現せしめた。加うるに此校の付属校
舎として精神的にも完備した寄宿舎の設備があつて，是等遠来の学徒はほとんど全部を
入舎せしめ，その全盛時代には舎生70余名を算した。

著名な来訪者と出身者

柿原明十の「八名高等小学校を偲ぶの記」「乗本学校講堂の記」によると、八名郡高等小学校へは、桂太郎（師団長当時、のち首相）、乃木希典（旅団長当時、のち陸軍大将）など軍人・大学教授・知事等視察に訪れた名士が多く、また、出身者にも陸軍大将松井石根をはじめ、数多くの著名人があったと伝えている。

<来校諸名士>

- | | | | |
|---|----------|-------|----|
| ① | 後総理大臣 | 桂 | 太郎 |
| ② | 後陸軍大将 | 乃木 | 希典 |
| ③ | 後陸軍大臣 | 木越 | 安綱 |
| ④ | 後陸軍大将 | 土屋 | 光春 |
| ⑤ | 後陸軍少将 | 佐藤 | 正 |
| ⑥ | 後陸軍少将 | 石田 | 正珍 |
| ⑦ | 後陸軍少将 | 門司和太郎 | |
| ⑧ | 後陸軍少将 | 牛島 | 本蕃 |
| ⑨ | 東京帝大理学博士 | 神保 | 小虎 |
| ⑩ | 東京帝大理学博士 | 脇水鉄五郎 | |

他に文学博士，貴族院議員，

愛知県知事等多数

<出身諸名士>

- | | | | | |
|---|-------|-------|--------|-----|
| ① | 陸軍大将 | 松井 | 石根 | 富岡 |
| ② | 教育家 | 森田 | 要作 | 一鍬田 |
| ③ | 海軍大佐 | 本多 | 数馬 | 中宇利 |
| ④ | 文学士 | 牛塚 | 良道 | 庭野 |
| ⑤ | 教育家 | 山本 | 嘉一 | 庭野 |
| ⑥ | 法学士 | 杉田 | 富 | 金沢 |
| ⑦ | 米国工学士 | 竹尾 | 年助 | 賀茂 |
| ⑧ | 教育家 | 小林 | 為助 | 萩平 |
| ⑨ | 凶案家 | 中野 | 喜平 | 嵩山 |
| ⑩ | 医師 | 福田常太郎 | | 賀茂 |
| ⑪ | 陸軍中将 | 松井七夫 | (石根の弟) | |
| ⑫ | 医学士 | 佐久間泰次 | | 金沢 |
| ⑬ | 医学士 | 山口 | 静雄 | 吉川 |
| ⑭ | 法学士 | 富安 | 謙次 | 金沢 |
| ⑮ | 県会議長 | 加藤 | 正衛 | 平野 |
| ⑯ | 医学博士 | 久野 | 義磨 | 中山 |
| ⑰ | 工学士 | 竹尾 | 秋助 | 賀茂 |
| ⑱ | 農学士 | 高橋小十郎 | | 賀茂 |
| ⑲ | 法学士 | 後藤 | 秀次 | 金沢 |
| ⑳ | 海軍大佐 | 高柳勝次郎 | | 松原 |

他に 海軍機関大佐 浅古徳助 一鍬田

文学士 山本 義雄 鎮玉村

医学士 中山 一二 細川

俳人 富安 風生 金沢

教育者 小林佐源治 一鍬田

なお、八名高出身者で以上の外、高等専門の学府を出られ、国家の中堅となって働いておられる方々は、数多ありますが、省略をした。

昭和10年1月

柿原明十 記

(資料室の実物で確認できます)

藤森校長を懐く

小林佐源治 「郷土 22 号」より抜粋 昭和 37 年 1 月発行

ぼくがこの高等小学に入ったのは明治 20 年で、名も八名郡立高等小学校といい、生徒は西遠地方から八名郡を中心に、南設楽からそれぞれ藤森校長の名声を慕って集まった者ばかり、中にはデクノ坊もないではなかったが、大方は高い理想を持つ秀才ぞろいであった。

次にその頃の先生は、藤森校長とそのスタッフとして、当時の教育界のエキスパート山中又三郎、巻茂吉、林栄西、鈴木豊三郎、中野喜平、女師としてアンベ先生等で学園さながら勇将猛卒の一大叢林だった。当時、僕の持っていた書物を書くと

- ・荻野山之著 日本歴史（菊判約 300 頁 2 円 50 銭）
- ・カツトル氏著 生理養成論（菊判約 300 頁 2 円 50 銭）
- ・林栄西著 数学（約 100 頁 四六判 30 銭）
- ・ナショナルリーダー（巻 1～3 まで 当時何人にも周知の有名な本）
- ・チャンブレイン英文典（四六判約 100 頁位）
- ・幾何教科書（四六判約 100 頁で多分半面だけだった）
- ・日本外史（和本 10 冊位、漢文古来有名な本）
- ・数学三千題（有名な本、横長のような本）

ちなみに教室における主要教科目の筆記は、生徒各自が毛筆で文語文で書いた。

有名な札幌農学校のクラーク博士は帰米の際学生に、「Boys be Ambitious」と言ったが、藤森校長は氏にまさるとも決して劣るなき大理想をもって、自ら教育の権化となり、これを接するもの咫尺するもの、ことごとくその熱火に燃えた。さらに言いかえると、脈々たる藤森火山脈は、かの富士帯火山脈のごとく炎々と東三河と西遠に火の玉となって燃えたのである。（後略）

（一銚田出身 東京都在住 教育家 元東京高師付小中教官）

小林佐源治は、1880（明治13）年生まれ、八名郡八名村一銚田斎ナダ14番地、小林周平の長男。一銚田尋常小学校を卒業後、1897（明治30）年八名郡立八名高等小学校入学。藤森校長のすすめにより、1898（明治31）年、母校一銚田尋常小学校准訓導となる。翌年愛知県第二師範学校簡易科入学、卒業後、愛知第二師範学校附属小学校訓導として採用された。1908（明治41）年、東京高等師範附属小学校に転任。指導困難とされた複式編成学級や低能児学級の指導法を探求、大正新教育運動期に活躍。生涯担任で通したが多くの著書、論文でその学級経営論が評価された。

八名高等小学校の思い出

浅井誠一

「郷土19号」より抜粋 昭和36年4月発行

私が八名高等小学校に通学したのは、明治40年から43年までの頃であった。尋常小学校4年卒業後、高校1年に進み、2年の頃、尋常小学校修業年限が4年から6年に延長した関係上、高小2年の終了後に再び、高1・高2を繰り返して、結局4カ年の高小教育を終了した。

八名高等小学校の位置は、富岡警察署の裏に当たって道路に沿っていた。校地の奥行きはなかなか広くて、中庭と運動場の西端に、竹藪が境を画していた。

八名高小の当時を省みて、第一に頭に浮かんでくるものは、運動場の西南隅に、天にもとどくかと思われるほどの松の大木があった。樹齢数百年を経た老木で、高さ十丈余（3・4十米余）亭々と空にそびえていた。目通りの直径は7・8尺（2・5米）もあると思われた。ここは生徒の休憩場でもあり、隠れ家でもあり、また論議の場でもあった。その隣に続く竹藪には、椿の花がきれいに咲いて、春の来る日を知らせていた。この老松と藪を背景とした運動場は、相当広いものであったと記憶している。しかし、当時の運動は、まだ現在のような競技は行われず、また、学校祭とか仮装行列とかいうものもなく、みな、体操の実習とか、啞鈴体操とかいうもので、格別印象に残っているものもない。

教室や校舎については、とりたてて言うほどのことはないが、寄宿舎とその古つるべは、忘れられぬものである。これは、その昔、八名郡高等小学校といわれた頃の名残である。当時は、八名郡の全部からこの学校に通学したので、寄宿舎に入って勉強した生徒も相当あったはずである。その当時のことは、漠然として聞き覚えのある程度である。私達は、八名村立高等小学校の時代で、この校舎に入った最後であった・私たちが通学した当時は、この寄宿舎に入寮の者はほとんどなかった。ただ、その裏庭に残った古い車井戸と古つるべは忘れることができない。水質もよく、夏はことに冷水が美味しい味であった。

私たちが在学当時の校長は鈴木鯛次郎先生で、職員は全部で十数人おられたと思う。生徒は高一が60人乃至70人、高二もほぼ同じぐらいで、合わせて120人乃至140人ぐらいであったろうか。時々には、高一全部が大教室に集合して、一斉に授業を受けたことがあった。合同授業は、実にはぎやかな、さかんなものであったと思われるが。生徒は割合に、真面目に勉強したように記憶している。（後略）

松井石根

参考（資料室展示パネル・ウィキペディア等）

漢学者松井武国の6男として明治11年名古屋に生まれ、明治22年6月、**愛知県収税部富岡出張所**の所員として武国氏一家は富岡へ移り住み、石根少年、実弟七夫少年（後年陸軍中将）共に在学した。石根少年は八名高卒業後、成城学校、陸軍士官学校（次席）、陸軍大学校（首席）を卒業。陸軍大学校在学中に日露戦争に従軍した。参謀本部附、外国駐在武官、ジュネーブ軍縮会議全権委員を歴任、昭和10年予備役編入、



同12年現役復帰、中支那方面軍司令官、当時の**首都南京を攻撃・占領**した。南京戦後に、一部の兵士によって掠奪行為が発生したと事件の報を聞き、「皇軍の名に拭いようのない汚点をつけた」と嘆いたという。

後の東京裁判における宣誓口述書では、一部の兵士による軍規違反の掠奪暴行は認めたものの、**組織的な大虐殺**に関しては否定している。しかし、不法行為についての防止や阻止・関係者の処罰を怠ったとして**死刑の判決**を受ける。この判決について、ジョセフ・キーナン検事は、『なんとという馬鹿げた判決か！松井の罪は部下の罪だ。終身刑がふさわしいではないか』と判決を批判している。ここでいう部下には、皇族の朝香宮鳩彦王が含まれており、昭和天皇の免訴問題と絡み、松井が身代わりになったという指摘が存在する。

昭和23年12月23日、**A級戦犯七士**と共に処刑された。現在、松井大将の霊は、熱海市伊豆鳴沢山の興亜観音及び同所七士の墓及び三河湾の三ヶ根山頂の殉国七士の墓に祀られている。



松井軍司令官らの南京入城と城門前の日本軍

各師団や各連隊は南京城一番乗りを競った。昭和12年(1937)12月10日から始まった攻撃は、多数の日本兵士の犠牲を招きながらも激しく続き、13日夜明けには、中国軍の組織的抵抗は終わった。17日午後1時30分、松井石根方面軍司令官を先頭に入城式が行われた。この写真は空輸によって同日の夕刊に大きく報道された。だが、その間に南京事件の惨劇が起こっていた。